TOKUMA NOVELS

川田弥一郎
逆転検屍

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区東新橋一ノ一ノ一六　郵便番号一〇五-五五
電話三五七三・〇一一一
振替〇〇一四〇-〇-四四三九二

© Yaichirô Kawada 1995
落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan
〈編集担当　佐藤綾子〉

ISBN4-19-850250-1

書下し長篇 女医・椎葉悠海子（しいばゆみこ）の事件簿

逆転検屍

川田弥一郎

徳間書店

TOKUMA NOVELS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　朝の検屍　7
第二章　肛門の奥の遺留品　36
第三章　学会での出会い　70
第四章　沼津ナンバーを追え！　92
第五章　無に帰った男　118
第六章　先端医学と古書　157
第七章　深夜の激闘　199

本文挿画・坂本勝彦

第一章　朝の検屍

1

サイド・テーブルに置かれた灰色の病院内電話の鳴る音で、椎葉悠海子は目を覚ました。

電話の横のデジタル時計の白色の文字は、午前五時十五分を示している。

この病院の当直では、十一時以後に起こされることはめったにない、とこの病院の当直を頼んだ大学病院の堀越佑一講師は保証してくれたのに……。

悠海子はいささか恨めしく思いながら、受話器に手を伸ばした。

「救急隊から連絡が入りました。中倉公園で倒れている人が、もう亡くなっているようで、確認をしてほしいとの依頼です」

主任看護婦の佐伯美和が、眠さを感じさせない、はっきりした口調で言った。彼女とは、十五時間前、悠海子がこの病院に到着した時に初めて会ったばかりである。

「こちらには運んでこないのね？」

「ええ、そのままの状態で、警察にも見てほしいからでしょう」

「自殺なの？」

「いいえ、細かいことは不明ですが、病死のようです。お願いします。院長先生は、警察には大変協力的な方なんです」

悠海子はベッドを抜け出した。

寒い……。

今日は三月五日、暦の上ではもう春でも、明け方

は二階の当直室の空気は冷えきってしまっている。パジャマを脱いで、白衣に着替えるのが、かなり辛かった。

この栗林病院は、愛知県東部のF市に位置するベッド数三十ほどの個人病院であった。

院長はたいへん真面目な人らしいが、長年やっていると、さすがに月に一度の週末ぐらいは外で泊まりたくなったとみえて、毎月第一土曜日には、医学生時代の同級生にあたる中部医科大学第三内科の堀越講師に名古屋から来てもらっていた。

昨日は三月の第一土曜なので、本来は堀越講師が当直に来る日である。それが不可能になったのは、一昨日になって、東京から研究会の講演に来る東都大学第一内科の教授の接待をするという仕事が、堀越に回ってきたからであった。

あわてた堀越は部下達に当直の代理を頼んで回り始めたのだが、誰も引き受けようとはしない。その光景を見て、悠海子は最後は自分の所に回ってくるようないやな予感がした。

予感は現実となり、動物実験、データ整理、図書館、美容院、ショッピングといった、この週末をあてにして立てていた予定の大半は潰れてしまった。

当直が始まってみると、幸い、外来患者は一時間に一人来る程度で、入院を要するような重症者は一人も来なかった。

夜の八時以後は医局の電話も鳴らなくなり、零時半には当直室に引き上げて、ベッドに入ることもできた。

そのままぐっすり寝て、昼過ぎにこの病院に戻ってくる栗林院長に挨拶すれば、大変楽な当直で終わるはずだったが、そうは問屋が卸さなかった。

一階の外来診察室に明かりが点り、黒い往診鞄を抱えた白衣の佐伯主任が、診察ベッドに腰掛けて悠海子の到着を待っていた。二十代後半の小柄な主婦

だが、実にきびきびと仕事をするので、悠海子はずっと感心していた。
「夜のニュース、聞かれました？」
佐伯が尋ねた。
「いいえ。何のニュースですか？」
「名古屋の南区で発砲事件があって、巻き添えになった通行人が大怪我をしたそうです。物騒ですね」
「ひどい。犯人は捕まったのですか？」
「いいえ、まだ逃げています。そのうち捕まるでしょうが……さて、行きましょうか」
佐伯は、往診鞄を右手に持って立ち上がった。
「私が外に出ていいのですか？」
悠海子は当直医がいなくなることが少し心配だった。
「すぐ近くの公園ですよ。寒いから一応車で行きますが。ポケベルも持っていきますし……」
佐伯は愛想よく微笑んで答えた。
佐伯の運転で夜明け前の薄闇の街路を走って、公園の駐車場に着いた。コンクリートの駐車場には、救急車が一台停まっていた。
周囲を木に囲まれた、四角形の、広い公園だった。ずっと奥の方に小さな建物があり、明かりが漏れている。それ以外に明かりは見当らない。駐車場の近くまでは水銀灯の光がどうにか届いていたが、その奥はかなり暗かった。
鎖の柵を越え、公園の内部に入った。
佐伯は懐中電灯で地面を照らしつつ、さっさと歩いていく。悠海子はあとからついていった。
公園の百五十メートルほど向こうがF駅の裏口だった。駅の明かりは見えるが、駅の裏の飲食店街の明かりはすっかり消えていた。
遊園地の砂場を過ぎ、暗い花畑を過ぎ、明かりの漏れる小さい建物の所まで来た。それは公衆便所であることがわかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

公衆便所の向こうには、赤い石畳の区画が続いていた。三台の金属ベンチが縦に続いている。手前のベンチで、いかにも寒そうに体を縮ませていた二人の救急隊員が立ち上がって、佐伯と悠海子に挨拶した。

救急隊員が強力な懐中電灯を一番奥のベンチの手前の赤い石畳の辺りに向けた。そこに、男が仰向けに倒れていた。

男が吐いたらしい黒い血が、石畳の上やベンチの上、男の服の上に飛び散っていた。

六十代の前半ぐらいだろうか、中肉中背、顔は蒼白。額は狭く、髪は七三の崩れたような感じ。鼻の下に不精ひげが生えかかっている。

頬にも、鼻にも、顎の線にも丸みがあり、全体として丸顔といえる。

着ているものはあまりいいものではない。くたびれた赤褐色のブレザー、折り目が消えて皺の目立つズボン、褪せた黄色のベスト、衿に汚れの目立つワイシャツ、ひしゃげた黒い靴。

死んでいることは一目みて明らかだった。それでも、確認の儀式は必要だ。

悠海子は顔と、足と、手に触れてみた。どの部位にも、すでに死後硬直は始まっていた。

左目の目蓋を上下に押し開いた。瞳孔は完全に広がり切っていた。

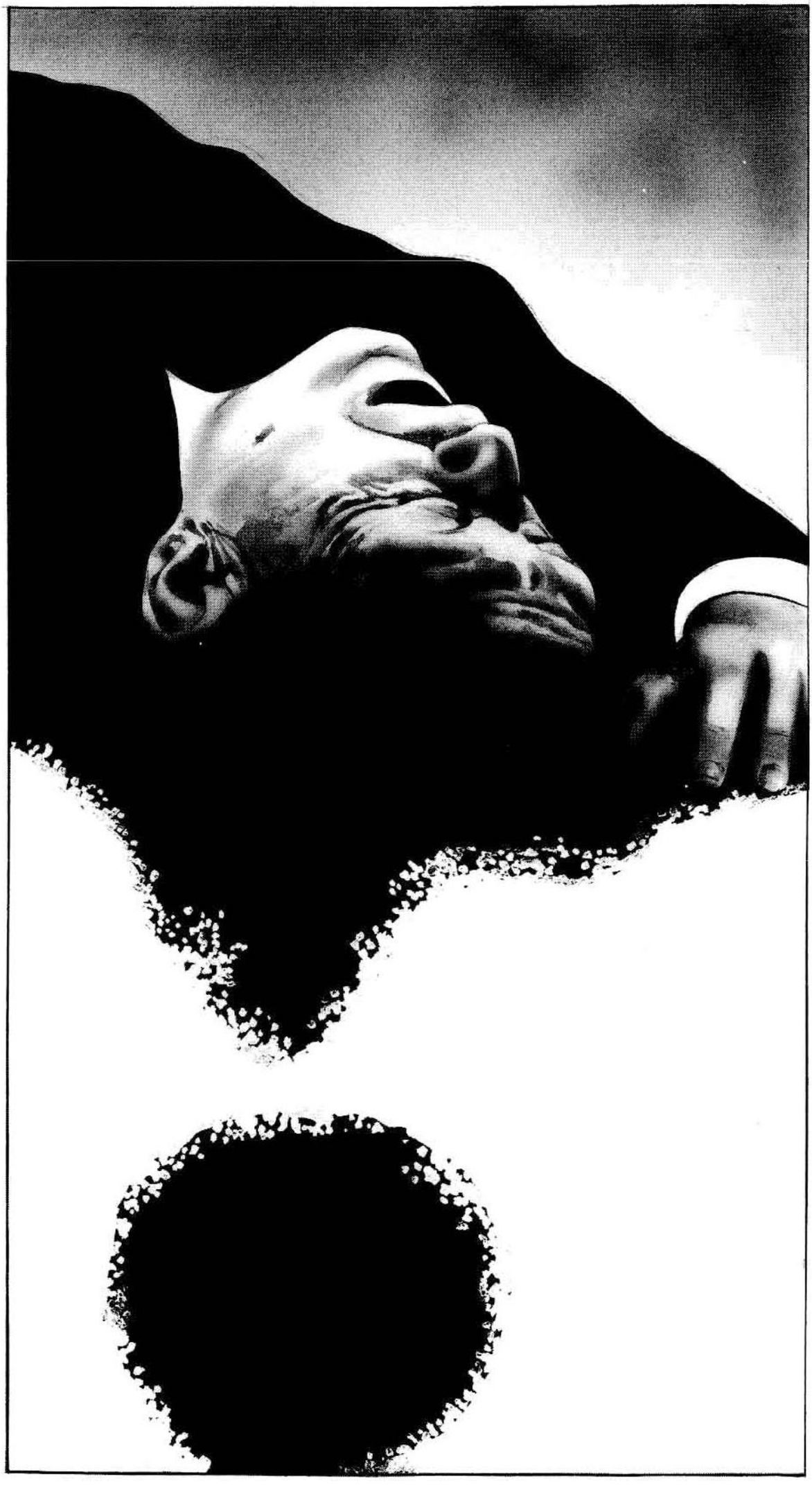
下の目蓋の内側は真っ白で、貧血があることがうかがわれた。

口の中には、酒と血の匂いが残っていた。

佐伯が男のブレザーとワイシャツのボタンを外し、シャツを上に押し上げてくれた。

悠海子は男の裸の胸に聴診器を当てた。もちろん、呼吸の音も、心臓の打つ音も聞こえなかった。

目蓋の貧血は、かなりの血が失われたことを示している。そして、実際、血が辺りに飛び散っている。



悠海子はこの男の死因の見当が付いた。
「病死でいいのですね」
年配のほうの救急隊員が尋ねた。
「そう思います。でも、警察には連絡してください」
「もちろんです。何の病気でしょうか？」
「食道か、胃からの出血で血を吐いたのではないかと思います。たとえば胃潰瘍。ただの推測ですが」
「そうですか」
悠海子は男がどこから来たか考えていた。男の口の中には酒の匂いが残っているが、死体のまわりには、酒の壜やコップなどは見当らない。男はここに来る前にどこかで酒を飲んでいたらしい。その場所としては、近くにある、駅裏の飲食店街の可能性が高いように思われた。
飲み屋で飲みすぎた男は、ふらふらになってこの辺りまで歩いてきた。公園を見付けて一休みしようとするが、ベンチに坐るか坐らないかのうちに、血を吐いて倒れ、亡くなってしまった……。
「こんな時間によく見つかりましたね？」
悠海子は逆に救急隊員に尋ねた。
「早朝のランニングをやっている人がいるんです。この寒いのにご苦労さまなことです。そこのトイレに立ち寄って、出て来たところで、見付けたようですね」
悠海子は寒さが堪え難くなってきた。
冷たい朝の大気が白衣に染み通る。歩いていればともかく、じっと立っていると、身震いするほど寒かった。
悠海子は体を暖めるため、両手で肩から肘を擦った。
佐伯が往診鞄の中からポラロイドカメラを取り出した。死体に向けて構える。フラッシュの光が闇を貫いた。
「院長に言われているんです。死体の確認に行った

時は、写真を撮っておくようにって」
佐伯が悠海子に説明した。
「必要なんですか？」
「いいえ、ただの御趣味。事件や検屍がお好きなんです」
佐伯は苦笑して言った。
「帰りましょう」
悠海子は手足を震わせながら、佐伯に呼び掛けた。

2

「あとでまた呼ばれますよ」
帰りの車の中で佐伯は言っていた。
その言葉通り、二十分ほどして、F署の中西という刑事から電話があり、死因について悠海子の医学的意見を求めてきた。
それから一時間が過ぎた。
悠海子が医局で雑誌の論文を読んでいると、また中西から電話が掛かってきた。死体を警察署に運んだので、検案をしてほしい、という。
やっぱり面倒なことになってきた……。
検屍とは異状死体を検査することであり、検案とはその検査所見に基づいて、死因、死亡時刻、死亡状況・病死と変死の別等を医学的に判断することである。検視という言い方もあるが、これは検屍とほとんど変わらない。
死体の外表検査だけでは確実な判断ができない場合は、死体解剖を行う必要が出てくる。
東京二十三区内などのように監察医（かんさつい）が置かれている地域では、最初の検案も解剖も監察医が担当することになる。しかし、それ以外の地域では、犯罪による死亡の可能性の低い場合には、最初の検案を担当するのは、多くは警察医もしくは一般の医師であり、解剖の必要が出てきた時に、大学の法医学教室

等の専門施設に送ることになるのであった。
悠海子はもちろん、検屍も検案も初めてではない。大学を離れてすぐに勤めた岐阜県の田舎の病院では、首吊り自殺死体や池に飛び込んだ死体を診させられたことがあったし、機械に巻き込まれた死体も診たことがあった。
野次馬的興味が全くないわけではないが、こんな所まで来て死体を診たいと思わないし、警察とも関わりたくなかった。
とはいっても、警察への協力に熱心な栗林院長が留守では、悠海子が行くしかない。
パトカーで迎えに来てくれた中西は、顔にも体にもあまりごつごつした所のない、一見学者のような感じの三十代後半の男だった。
悠海子は厚いカーディガンを羽織り、往診鞄を抱えてパトカーに乗り込んだ。
警察署の裏の駐車場でパトカーを降りた悠海子は、車庫の前まで歩かされた。あたりはすっかり明るくなっていたが、寒さは相変わらずだった。
車庫の前のコンクリートの上に青緑色のシートが敷かれ、その上に置かれたものの上に、青いビニール・シートが掛けられていた。青い作業服の鑑識課員が三人、白い息を吐きながら、悠海子の到着を待っていた。
青いシートが取り除かれた。
服を全部はぎ取られた、素裸の男の死体が現れた。悠海子は思わず目をそむけたくなった。
死人でも生きた人でも、素裸の人間を診るのは気分のよいことではないし、何か落ち着かない。診察に必要な部分以外は、何か掛けてやりたくなる。
「検案を始めてください」
最年長の、赤ら顔の大柄な鑑識課員が悠海子に頼んだ。
始めてくださいと言われても、悠海子には何をし

たらよいのかわからない。困惑して立ちつくしていた。

しかし、それは鑑識課員達にとっては大した問題でないことがすぐにわかった。今の言葉はただの形式で、実際に検案するのは彼らなのだった。

鑑識課員達はてきぱき死体の各部を点検していく。

「首に索溝、扼痕はありませんね？」

赤ら顔の鑑識課員は悠海子に尋ねる。悠海子は首を見て頷く。

「手首にためらい傷なし。そうですね？」

「腹に外傷認めず。手術瘢痕なし、ですね？」

「脊椎にずれなし」

悠海子は、だんだん馬鹿馬鹿しくなってきた。

質問の形を取っていても、実際にはただの確認である。鑑識課員達は素人の悠海子の見解を本気で聞く気など全然ないようだ。とんだ猿芝居だった。悠海子は手続き上必要だから、ここに立たされているだけの話なのだ。

「こんなところですかね」

赤ら顔の鑑識課員が終了宣言を出しかかった。

「待ってください」

悠海子は初めて自分から動いた。

法医学のことは確かに彼らの方が詳しい。だが、これは自殺ではなく、病死であって、本来こちらの領分だ。おまけに消化管からの出血である。内科医としての悠海子は、あと二カ所、口の中と、肛門の中の確認が必要だと考えた。

往診鞄を開け、手袋をはめた。

口の中は硬直のためによく見えない。酸やアルカリで焼かれたような痕はなさそうだった。

悠海子は鑑識課員達に死体を横向きにするように頼んだ。

肛門の外見に異常はない。悠海子は指を入れ、肛門から直腸にかけて探った。指の届く限り、貧血の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com